優秀賞

【社会科】

子どもたちが社会に向けて提案する課題解決型学習の可能性

立命館小学校
山田 航大（やまだ こうだい）

1 はじめに

「○○について、先生はどう思いますか?」授業の中で児童から聞こえてきた声である。高学年にもなると、多くの児童はマスメディアを通して様々な情報を手に入れている。だから、自分なりの考えや家庭で保護者と会話したことなどを授業の中で積極的につぶやく児童もいる。「○○って実際のところはどうなっているの?」と質問する児童もいて、彼らと会話することは、私にとっても楽しみの一つである。

一方で、こうした実態を受け、子どもたちの学びを実社会と繋げることができれば、さらに学びは深いものになるのではないだろうかと考えている。普段から授業や雑談の中で、世の中で起こっていることについて話すくらいなのだから、子どもたちは大人が創り上げている実社会に対して自分なりの考えを持っているに違いない。児童と社会を繋ぐ場を、学びの機会として設けることは、これからの教員に求められている役割の一つと言えるのではないだろうか。

また、学びの中で受け身になるのではなく、児童それぞれが自らの考えを社会に向けて発信することができるようにしたいと考えた。社会科見学に行ったりゲストティーチャーを招いたりすることで、学校と社会との接点を作り出すことは可能だが、それに加え、児童が自ら考えていることを社会の人たちに提案することで知識を活用し、思考力や判断力・表現力を育てる学びにもなると言える。こうした学びの可能性を広げることが本論文のねらいである。

本論文では、５年生児童が社会科「これからの食料生産とわたしたち」（東京書籍『新しい社会５上』）の学習で取り組んだ内容について報告する。今日、「食料自給率向上の必要性」や「フードロス」という社会課題があり、特に「フードロス」については、様々な企業が課題解決に向けて尽力しているという実態がある。このような実社会で現在着目されている事象について考えることは、社会科における公民的資質の育成にも繋がると考えた。さらに、その解決策について自らの考えを専門の方々に発信することは、児童にとって社会事象を自分ごととして捉えるだけでなく、将来的な社会参画のための第一歩として大きな意義があると考え、本実践を行った。

2 本実践の背景

本実践を実現するにあたって、きっかけとも言える背景が大きく二つある。

一つ目は、コロナ禍という実情である。本実践を行った2020年度は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、休校措置が継続しているという状態から新学年がスタートした。そのため、休校が明けてからの教育活動も様々な制限の中で行わなければならなくなり、全てがこれまでどおりに戻ったとは言えなかった。実際に、本校でも

子どもたちにとって大きな楽しみの一つである宿泊体験学習や社会科見学といった校外での学びを中止せざるを得ない状況となった。社会科の学びでは、実物を見たり校外に出て自ら調査をしたりすることで学びを広げることが欠かせないにもかかわらず、それらができないということはとても大きな痛手であった。こうした状況を打破するために何かできないかと考え、オンラインを活用することにした。オンラインを活用することで、教室と実社会を繋ぐことができると考えたからである。さらに、オンライン活用の利点は、時間の都合を合わせることができれば、場所を問わずに実践できるということである。これにより、今までは距離が遠く、実現が困難だった方々とも繋がりを持てるのは、学びの機会を広げることにもなる。当然のことながら、実物を見なければ効果が半減する場合もあるが、今回はオンラインによる効果を最大限に発揮させるために、プロの方と繋ぐということのみに限定した。見学という要素を入れず、人との繋がりのみにすることで、オンラインを通してコミュニケーションが生まれる。そのコミュニケーションにこそ、子どもたちとプロの方を繋ぐことの価値があると考えた。こうして、オンラインによってコロナ禍でも、実社会で活躍されているプロの方との学びの場を実現することができた。オンライン活用による社会との繋がりを持つことは、コロナ禍でなくても実現しやすく、今後の教育実践において持続可能な取り組みであると考えている。

二つ目は、実社会の方にとって、子どもたちの考えは価値が高いものだということである。先に述べたプロの方というのは、株式会社TNCの小祝誉士夫氏（以下、小祝氏）である。小祝氏は、世界のトレンドリサーチのプロであり、食に関する知見を有している。食料自給率やフードロスをテーマにした内容には、この上ないプロの方である。小祝氏とは、大学のプログラムでご一緒したことをきっかけに出会い、本実践の協力を依頼すると、快く引き受けていただいた。小祝氏と本実践について話す中で、児童のアイデアや考えをどのような形式でまとめるとよいだろうかという話題になった。その際、小祝氏は、「子どもらしく、ぜひ手書きの絵などを入れてほしい」とおっしゃった。私は、ワードやパワーポイントを活用してまとめさせようかと考えていたため、正直驚いた。小祝氏によると、手書きの絵の中にこそ、子どもたちの素直な思いや斬新なアイデアが表現されるという期待を込めてのことであった。小祝氏と話す中で、子どもたちのアイデアには、大人でも思い付かないような可能性が秘められており、社会の方にとっても刺激的なものであるということに確信を持つことができた。子どもたちのみならず、プロの方もメリットが感じられる実践にすることは、社会と繋ぐ実践に取り組む上で重要な要素の一つだと考える。

さらに、本実践は小祝氏とのオンライン授業にとどまらなかった。小祝氏とのオンライン授業後、小祝氏から「子どもたちのアイデアが素晴らしいので、ぜひ企業に提案してみてはどうだろう」と声をかけられた。そこで、カゴメ株式会社が実施している「野菜をとろうキャンペーン」に参加している複数の企業の方々に、子どもたちのアイデアを提案することになった。これが実現したのも、プロである小祝氏が子どもたちのアイデアを高く評価してくださったことがきっかけであると感じている。

3　食料生産改革プロジェクト～食料自給率向上とフードロス解決に向けて～

小祝氏への提案も含め、「食料生産改革プロジェクト」と題して学習を進めた。単元全体の大まかな学習の流れは、以下のとおりである。企業への提案をした後、代表児童がカゴメ(株)・ウォルト・ディズニー・ジャパン（株）と交流会を実施するに至った。それぞれの内容について、後に詳述する。

①	日本や世界の実態を把握する （知識の習得・課題把握）
②	食料自給率向上やフードロス解決に向けた取り組みを考える （自らの考えをまとめる）
③	小祝氏とのオンライン授業 （プロの方との交流）
④	児童が自ら選んだ企業へアイデアを提案 （社会への提案を具体化する）
⑤	感謝状授与およびカゴメ（株）とウォルト・ディズニー・ジャパン（株）との交流会 （まとめ・プロの方との交流）

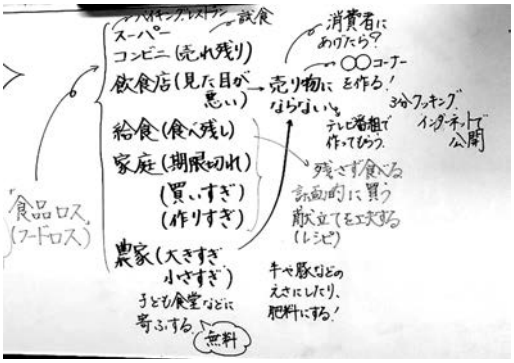
（1）日本や世界の実態を把握する

まずは日本の食糧生産に関する実態を知るための活動から始まり、単元の導入として非常に重要な時間である。教科書を基にしながら教材研究するとともに、食料生産に関する最新のデータも活用した。児童は学習する中で、日本では地形や気候の特色に合わせて、各地で様々な食料が生産されていることを理解する様子が見られた。一方で、日本の食料別自給率を知ると、米以外の食料自給率は十分とは言えないといった気付きが見られ、日本の食料自給率に対する課題が学習を通して明確になった。また、輸入に頼り過ぎることの欠点についても考え、課題意識を持つことに繋がった。

さらに、フードロスについても大きく取り上げた。これは日本のみならず、世界的な課題にも目を向けてほしいというねらいがあったからである。最近では、マスメディアを通してフードロスに関する取り組みが報道されることも多い。それだけ注目されているからこそ、授業の中でも丁寧に扱うべき内容だと考えた。

（2）食料自給率向上やフードロス解決に向けた取り組みを考える

食料自給率が低いということやフードロスの実態を知ったうえで、児童に課題解決に向けて



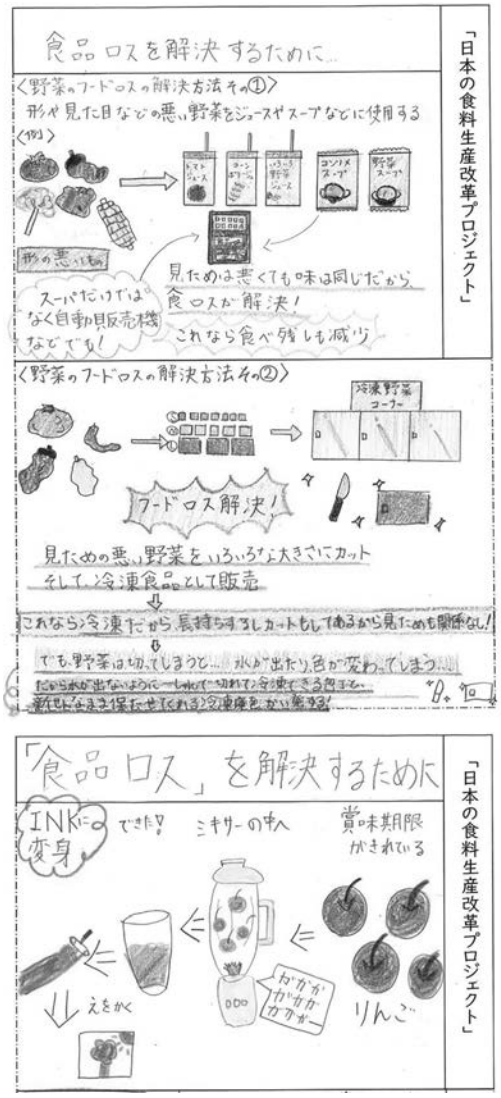
【資料①：フードロス解決について学級全体で議論した時間の板書】

できることは何かを考えさせた。ただし、フードロスについては、家庭でできることではなく、生産者や販売者ができることについて考えさせることにした。話し合い活動を通して、「何でもよいから解決策を考えてみよう」とすると、「家で食料品を買い過ぎないようにする」・「計画的に買うようにする」などのアイデアになってしまい、提案性に欠ける内容になってしまうと考えたからである。全て自由というわけではなく、少し制限をかけることで、特化したアイデアが生まれることもあると考えている。それぞれの児童が考えたアイデアを以下にいくつか紹介する。

・形の悪い野菜を集めてジュースにする。
・野菜汁にして服を染める。
・豆をお菓子の中に入れて消費量を増やす。
・廃棄野菜を使ったレシピに関するアプリを開発して、店でも販売できるようにする。
・地産地消ができるイベントを開催する。
・国産バナナをお菓子に入れて生産量を上げる。
・貧困の人に向けたフードバンクを作る。

（3）プロの方とのオンライン授業

前述したとおり、小祝氏に対して児童が自らの考えを提案し、フィードバックをもらうことが本プロジェクトの中でも重要な位置付けとなった。そこで、授業時間内だけでは時間が足りないと考え、児童が考えた全てのアイデアに事前に目を通



【資料②：絵や文字を組み合わせながら児童がまとめたアイデア例】

していただいた。代表児童のみの考えを届けるということにしなかったのは、授業者としての大きなこだわりである。「全員分の考えを小祝さんに見てもらうよ」と伝えると、児童の意欲も高まると考えた。児童にとっても、自分たちのアイデアを見た上でコメントしてくださっていると分かったのではないかと感じている。

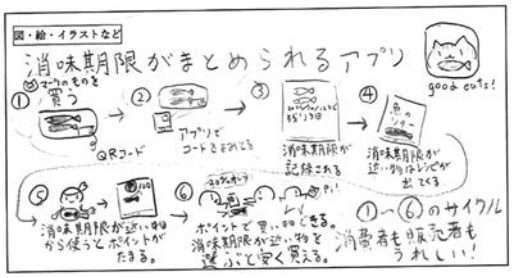
小祝氏には、子どもたちのアイデアを取り上げながら、海外の事例を紹介してもらった。児童の考えと実社会での事象が繋がる瞬間である。タイのお裾分け棚、デンマークの賞味期限切れや形の悪い野菜だけを売るスーパーマーケット、ドイツのフードロス解消アプリなどがその一例である。日本では見られないような食に関する様々な工夫を紹介してもらうことで、児童の興味や関心も一気に高まった。日本について知るだけではなく、世界に視野を広げることで、食に関する課題をより深く考えるきっかけにすることができた。

以下に、授業後の児童の感想を紹介する。

私が出したアイデアをすごく面白いと言ってもらえてとてもうれしかったし、ぜひ、お店に私の出したアイデアをやってみてほしいです。また、外国の工夫も説明してもらえることができてよかったです。この授業を受けてもっといろいろな工夫を見つけられたり、興味をもつことができてよかったです。
私たちのアイデアを振り返られ、また外国で行われている取り組みと比べたり、知識とすることができたので良かったです。私は、特にタイでの「おすそわけだな」になるほど、と思いました。また、ジャガイモの皮で消毒液を作るのは、今にぴったりだと思います。課題→アイデア→未来、という構成で物は成り立っていると知ったので、課題があるのは悪いことではなく、むしろ良いことだと思いました。
自分が「こうすればフードロスを解決できるんじゃない?」と思ったことを採用されるかもしれないと聞いてとてもワクワクしていました。小学五年生なのに未来を変える権利を持っていたりするので真剣に考えましたが、自分よりも面白い意見があってみんなが考えていることも知れたのですごくいい授業になったと思います。また、こういう機会があればぜひ参加させていただきたいと思いました。ありがとうございました。

【資料③：小祝氏とのオンライン授業の様子】

【資料④：野菜をとろうキャンペーンに参加している企業（2021年7月31日現在）】



【資料⑤：企業に向けた児童のアイデア例】

(4) 児童自らが選択した企業へ提案

小祝氏との授業を終えた後、ある提案を受けた。それは、「児童のアイデアを直接企業に提案してはどうか」という内容であった。早速実践したいと考え、依頼するとカゴメ（株）の「野菜をとろうキャンペーン」に参加している複数の企業に提案する機会を得た。そこで子どもたちには、複数企業の中から自分が提案したいと思う企業を一つ選択させた。その理由には、企業について調べる中で、企業が社会の中で果たす役割について知るきっかけになるとともに、「この企業にぜひ伝えたい」という意欲を高められるようにしたいというねらいがあった。

企業への提案をすることで、子どもたちの提案もより具体的な内容になったと感じている。社会でのニーズも考えながら、さらにアイデアを練る児童もいて、社会課題を解決するためにできることは何だろうかという考えを具体化するという段階になった。また、「自分のアイデアに合っているのはどこの企業かな」と考える姿が見られるようになり、社会との繋がりを意識していたように思う。

(5) 感謝状授与およびカゴメ(株)とウォルト・ディズニー・ジャパン（株）との交流会

児童のアイデアをそれぞれの企業にまとめて届けた結果、「考えてくれた子どもたちに何か返したい」と言っていただき、企業からの想いが形となった感謝状が授与されることになった。また、カゴメ（株）とウォルト・ディズニー・ジャパン（株）とのオンライン交流会が実現した。アイデアには、「子どもに野菜をもっと食べてもらう方法」や「大豆・枝豆・小豆で作るポテトチップス」・「野菜からなる新ファッションと新商品（科学繊維アレルギーの人に優しい服・〜赤ちゃんでも安全に使える商品〜）」などがあった。いずれも、子どもたちらしさがあるうえに、提案性の高いものであった。カゴメ（株）とウォルト・ディズニー・ジャパン（株）の担当者のコメントを以下に紹介する。

> カゴメ（株）執行役員 野菜をとろうキャンペーン担当 宮地雅典氏のコメント
>
> 『私たちカゴメは、子どもたちに野菜をもっと好きになってもらう活動を長年続けておりますが、今回の生徒の皆さんが考えた野菜の魅力を引き出すアイデアは素晴らしいと思いました。子どもならではの素直で斬新な発想に驚かされたとともに、わくわくしました。また未来を担う子どもたちを大変頼もしく感じました。』

ウォルト・ディズニー・ジャパン（株）コンシューマ・プロダクツ バイスプレジデント＆ゼネラルマネージャー 井原多美氏のコメント

『立命館小学校の生徒の皆さんからのプレゼンテーションはとても新鮮な体験でした。皆さんの素直な目で世の中を見ると一見関係ないように見えるものもどこかで繋がっていること、日本ならではの季節感の大切さ、そして苦手だなと思ったものでもアイデア次第で好きになれるかもしれないという想像力などを教えてもらいました。それらすべてがストーリーとして繋がっており、まだまだディズニーとして新しい価値を世の中に提供できるのだなとさらに楽しみが広がりました。』

【資料⑥：感謝状授与式とオンライン交流会の様子】

4 おわりに

子どもたちの学びの場を広げていくために、実社会とのかかわりは欠かせない。未来を生きる子どもたちが、現代社会の課題を知り、それと向き合いながら自ら主体となって課題解決に取り組むためには、そうした機会を増やしていくことが必要だと考えている。

これからの人材に求められる資質の一つに、アントレプレナーシップ（起業家精神）があげられる。これは、新たな価値を考えたり自ら積極的に行動したりするといった意味が含まれている。つまり、起業家のみに当てはまるものではなく、誰にでも求められる資質であると言える。だからこそ学校教育にもどのように取り入れていかなければならないのかを考えていく必要があるのだと思う。

子どもたちが「自分たちの考えで世界を変えていこう！」と思えるような機会を作ることこそ、将来自ら主体的に挑戦する姿勢に繋がっていくと考える。そのためには学校内のみで学びを追求するのではなく、社会とのかかわりも積極的に取り入れていきたいものである。さらに、教科横断型や年間を通してのカリキュラムを組むなどの工夫をすることで、より深い学びとなり、子どもたちの印象に残るものにもなるだろう。今後、そうした学びの可能性をさらに追求していきたい。

学校と社会との繋がりがさらに密になることにより、子どもたちがワクワクするような学びがたくさん生まれる可能性を感じることができた。子どもたちが社会の人たちとかかわったり、時には自らの考えを発信したりすることが増え、よりよい社会実現に向けた実践が広がっていくことを期待している。そして、それらの実践による経験が、今の子どもたちが社会人になった時の積極的な姿勢に繋がり、世界の様々な課題解決へと結び付くことを願っている。

【参考文献】

・ニュースリリース（2021年3月9日閲覧）
https://www.kagome.co.jp/library/company/news/2021/img/210309001.pdf